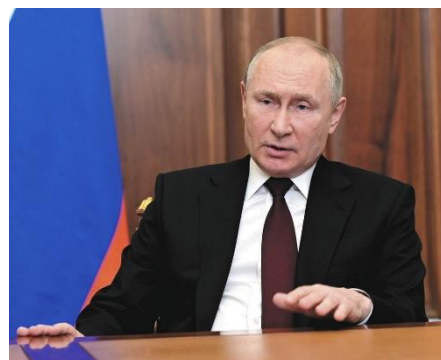




プーチンのウクライナ侵攻から学ぶ

菊とともに国花である桜が咲き春爛漫のわがニッポン、一方で、ひまわりを国花とする戦禍のウクライナに思いをはせると、“のどけき春”とは言っておれないこの頃であります。2月24日に始まったウクライナ侵攻は、国連憲章に照らすまでもなく、ロシアの行動（蛮行）は、決して許すことはできません。こんな時期に、読売新聞（4月17日版）「地球に学ぶ」シリーズに、東大名誉教授北岡伸一氏のウクライナ侵攻に関連する論考が載っていました。



…近年のロシアによる2008年のジョージア侵攻と南オセチア独立、14年のクリミア併合、同年の東ウクライナ紛争のいずれにおいても、西側の反応は鈍かった。…プーチン大統領はウクライナ侵攻を容易だと思っただのである。…第2次大戦後、これまでの世界が例外的に安定していたのであって、国際社会にはこういうことは起こりうると考えて準備しておく必要があったのだ。…いくつかの教訓を考えてみよう。「小さな侵略を軽視してはならない。」「自分の国は、まず自分で守らなければならない。」「日本は日米同盟があるから、アメリカが助けてくれるという人がいる。しかし、たとえば日本に対して小規模な侵略があつて、米国が支援してくれるだろうか。…それはわからない。自分の国を守るために必死で戦い、初めて他国は援助してくれるのである。…緒戦で後退すると、領土は失われかねない。…さらに北岡氏は続ける。…「戦後日本では、核の時代には通常戦力は無意味だという人がいた。しかし、通常戦力は重要で、特に侵略を阻止する反撃力の整備が必要である。」攻撃されたら反撃すると宣言し、相手に攻撃を思いとどまらせる程度の相当の規模の反撃力を保持することが望ましい。…「情報の重要性」である。紛争は、しばしば情報戦から始まる。2010年、尖閣で海上保安庁の艦船に、中国の漁船がぶつかってきた時、中国側で、日本から衝突してきたとする説明図を捏造（ねつぞう）し、ばらまいたことがあった。常に情報収集に努め、情報戦に備えなければならない。…日本も領土的・歴史的な経緯について、国際社会で常に（積極的に）啓蒙（けいもう）をする必要がある。

ついでながら、この時期ならではの側近の忠誠心を試したジョーク（作家の早坂氏）を『ニュースウィーク日本版』誌からご紹介します。◆バイデン大統領がビルの窓から飛び降りるように言うと、部下は「勘弁してください。私には妻も子供もいるのです」と訴えた。プーチン大統領が指示すると、その側近は泣きながら窓に近づいた。バイデン氏が驚いて止めると、彼は叫んだ。「止めないでください。私には妻も子供もいるのです」◆プーチン氏は22年間にわたって実権を握り、「現代のツァーリ（皇帝）」と呼ばれることもある。ジョークの体裁をとっても、その統治手法はあながち誇張ではないのだろう…

この号をお届けできる頃の戦況は、いかようになっているのでしょうか… 一刻も早い終結を願っています！



北岡 伸一 氏

